

女き高名悪

悪名高き女

富枝

昭和三十七年三月十五日 初版発行
昭和三十七年四月五日 再版発行

定価 三八〇円

著 者 大 原 富 枝

発行者 古 田 晁

発 行 所

東京都千代田区神田小川町二ノ八
株式会社 筑摩書房

電話 東京 〇七六五一(代表)
振替 東京 一六五七六八

印刷 睦印刷
製本 矢島製本

(落丁・乱丁本はお取替致します)

悪名高き女

空碧く海蒼き故郷

その春、この南海の小都會では一つの歌が流行っていた。それは日本のどの土地でも聴くことはない、この土地だけで歌われている特殊な歌であった。

南国土佐をあとにして

中支へきてから幾年ぞ

思いだします故郷の友が

門出に唄ったよさこい節を――

土佐はよい国南を受けて

さつまおろしがそよそよと。

その幾分の哀愁を含んだ、耳に馴染みやすく、気むずかしいところのまるでないメロディは、この小都會の中央にそびえる白亜三層の天守閣をかこんで、乳色に煙るような爛漫と咲きみだれた桜の花の中から、湧くように漂い流れでて、仰げば涙がにじんでくるような眩しく冴

えわたった空の四方に散っていた。

夜に入ってもそれは止むことはなく、イルミネーションに明々と映える城の天守閣をかこんで、夢のように白々と浮びでる桜花の霞の中から、卑俗さの中にも一種厳肅な哀感を誰の胸にもよびさまさせていた。

真夜中をすぎ、歌声の止んでしまったあとも、このメロディだけは虚空の闇の中に漂い残っていた。

真夜中の白々とした桜の花の霞の中にそのメロディだけが、まるで死者の霊のように漂い流れているのは、ある異様な妖しげな風景であった。

そして翌日はまた、その余韻の消え去らない桜花の霞の中に、その歌が唄われ、わきあがるように流れでるのである。

こうして眩しいほど碧い空と、蒼い海をもつ、この南の国には、町にも村にもこの歌のメロディが充ちていた。

それは日露戦争の時、難攻の旅順攻撃を命ぜられたことによって、勇敢だという不幸な名譽を背負わされた父祖の歴史のために、今度の戦争のときも敵前上陸の第一陣を命ぜられたこの土地の青年たちが、長い戦争の間に大陸で唄っていた歌で、数人の生き残りの兵隊たちが伝え

きて、戦後十年を経た今ごろ、急にこの土地の一般の人々に唄われたした歌だということであった。人々はその歌にひとりひとり別々の思いを抱いて歌っていた。この歌は聴く人の胸にもその人だけのもの、戦争の思い出の切なさを誘いだした。数年ぶりに故郷へ帰ってきて初めてこれを聴く私の胸にも――

――その日、私は郊外の種馬所しゅばしょという桜の名所の、花のトンネルの下にいた。

北には四国山脈の紫紺の屋根が、あくまでも碧い空の下に連なり、南は黒潮の太平洋にのぞむ香長平野の一隅にある、素朴な村であった。

朝の間は観光バス数台がくりこんで乱痴気さわぎがあったというが、私たちが龍河洞から車を廻して立寄った午後は、彼等の引きあげてしまったあとで、種馬たちの収容されている牧舎が広大なうまごやしの原っぱの彼方に遠く静かに見えていた。

一抱えもある桜が列をなして七分咲きのその根方に、僅かな人々が蕙を敷いて花見をしている。

私は久しぶりに逢う友人たちにかこまれて、うまごやしの原っぱに足を投げだし、花見客たちの酔態と花のトンネルを眺めていた。

喧嘩がはじまっているらしく仲間を仲裁するために、お互いに一つの玉のようになって、う

まごやしの原っぱをもつれつつ移動してゆく一組もある。それがまるでラグビー競技のように見えるほど、原っぱは遙々と見渡せる広大さであった。

私たちの薙の向うには、一枚の薙を敷いて一組の花見客がいた。その中の一人が私たちを写している友人のカメラの中に入れてくれといつて、酔態もうろうとはいりこんできていた。

「あしらアのう、鍛冶屋の懇親会じゃ、今日はのう、ええ機嫌に酔うたがよ」

彼は酔眼を閉じて唄いはじめた。南国土佐をあとにして、中支へ来てから幾年ぞ……

彼の向う鎚を握りきたえた部厚い皮膚を持ったその大きな両手は、打ち合わされると、じつによく響く快よい音を立てるのであった。

「のう、あっしゃア、戦争のとき大方死んじゃったがよ、南京でのう……」

鍛冶屋のろれつはもうあやしく、彼が切実な思いをこめて私たちにうったえようとする戦争の思い出は、もはや正確に私たちに伝わるわけではなかった。

戦友が、のう、あっしの戦友が……と彼はしきりに繰り返し、どうどうめぐりの述懐をくり返していた。

にも拘らず私には彼が私たちにいま、この戦後十数年を経たこの桜のらんまん咲く花の下で、何をうったえたいと思っているかがよくわかった。

「東京のお客さん」と彼は私を呼んでいった。

「まっこと、あっしやア、あいつのこと思うたら、たまらんがよ、酒も美味うないがよ」

彼はがっくりと折れたように首をうなだれてゆらゆらしたが、その頭をガバと持上げて一揺りすると、そのよく鳴る大きな手を打ち合せて唄うのだった。

月の野営に焚火をかこみ

.....

多分彼は中支の野戦で髭ぼうぼうの何年かを過してきたのであろう。私は酔眼もうろうとして威勢よく握手を求める中年の鍛冶屋の、厚っぼく大きな手を握ってわかれた。

車が街にはいり、本町通りを通過するとき、私は首をのばして芝居小屋のある路地の入口を覗きこんだ。

そこは昔の、思い出の中の風景とはいちじるしく変化していて、キョロキョロしていた私は車が通過する一瞬に、ようやく、ああ、あそこだ、とその思い出の場所を眼に捉えることができた。

そこはもうすでに二十年以上も前になる一九三七年の夏、支那事変と呼ぶ戦争のはじまった日の一夜、恋人の深夜の出征を見送った場所であった。

ザッザッザッとたくさんの軍靴が街路を踏んでゆく、潮騒のような音が、いま私の耳の中によみがえってくるのである。

あれから二十年、茫々として歲月は過ぎゆき、戦火に焼きつくされた故郷の街は、昔日の面影もないほど変化し、新しい粧いをもって再生している。感慨無量であった。

——その夜、私はある内輪なグループに招かれて、漫然としたおしゃべりをする約束になっていた。皆初対面ではあったが、文学の好きな人々で、たまたま小説を書くことを職業としている私の帰郷を機会に集ってくれた人たちでもあった。

その会場にあてられる旅館「泰山木」の名をきいたとき、私はあっと思った。

その女将である更科貴代は、昔私の知っている人であった。

私は彼女が私に逢うことを果して喜んでくれるか、それとも不快がるか、推察できなかった。しかし歲月は茫々として二十数年を経ていた。旅館という客商売をしている彼女がどうして昔のことにこだわるはずがあるだろう。この機会を大切にしよう、と私は思った。

このあたえられた自然の機会に彼女に逢いたい、と私は急に心をそえられる思いであった。旅館「泰山木」は海に近い静かな路地の奥にあって、そこにはいつてゆくと潮の香がした。周りは別荘か高級住宅地らしく、黄昏には少し間のある時間の落着いた築地の上から八重咲

きの桜の花房が垂れていたりする。

グループの中の一人であるラジオプロデューサーが先に立って私を導いてくれる。私のあとには十人ばかりの女たちがいた。

更科貴代との再会にこのような初対面の大勢の連れがいることに、私はひそかな困惑を感じていた。それは、このような立会人たちを前にして私に逢う貴代の心持を推察したからである。

彼女がそのために少しでも不快な気持になるとしたら、私は彼女に対して済まない気持になる。それよりもそのために彼女の気持がもしも、いくらかでも傷つけられるようなことがあったら、また久しぶりの私たちの再会が、本来の自然さを持つことができないとしたら残念だ、と私は恐れたのである。

「泰山木」の玄関は路地の更に奥まったところであって、奥の板場らしいところの忙がしげな気配はうかがえたが、玄関には女中の影も見えず、日本画家の描いたざくろの色紙が正面の壁面にかかっていた。

ラジオのプロデューサーは子供のある若い主婦であったけれど、まだ女子学生のような、黒いベレー帽のよく似合うデリケートな感じの人であった。

「こんにちは、おばちゃんいますかァー」

と玄関から声をかけた。

その声の親しみ深さと、もの馴れた日常性とが、この旅館の女将としての更科貴代のいまの生活を、とつぜんまなましく私に感じさせた。

自分ひとりでこの再会に感じていたある厳肅さと悲愴さを私はふっと反省したくらいであった。

「はあい——」

奥でそんな若い女の声がして、女中が一人顔を出し、挨拶をしてすぐ引込んでいった。そして入れ代りに彼女が姿を現わした。

私たちは眼と眼を見合せ、彼女はあつという顔をした。

「まあ、——さん……」

私の名を呼んだまま、彼女は一瞬茫然として坐っていた。

「とつぜんにごめんなさい——」

と私はいった。

「まあ、恥ずかしいわ、あたし——」

貴代はふと気づいたように両手で顔をおおった。おおいきれない生えぎわのあたりがたちまち赭く染ってゆくのを私は見た。けれど私の眼は自分でも全く思いがけなく湧いてきた涙におおわれて、彼女の姿がゆらゆらと揺れて見えた。

私は彼女があまりにも昔のままの姿で現われたのに愕いてしまっていた。全く彼女は二十年前とそっくりであった。

昨夜おそかったので、今さき起きたばかりだといひ、銘仙の着物に羽織を引っかけていた。髪はひつつめて束ね、顔は昔のままの若々しさであった。

私が思いがけなく涙を流してしまったのも、彼女があまりにあの当時のままであったからなのだ。もちろん容姿ではなく彼女から受ける感じそのものが……。

私は彼女をもっと異った女に想像していた。二十年という歳月がこんなにも彼女を変えることがないなどと、どうして考えられたろう。

「まあ、どうしましょう、こんな恰好で……」

彼女はそういい、とにかくまア、早く上ってちょうだい、とあわただしく、玄關いっぱい立っている女たちの方へも気を配った。

私はだらしがない、かえって貴代に対して失礼だと思ひながらも、涙が流れてきて口をきく

ことができなかった。友人たちに背を向けるようにして私は片隅に黙って立っていた。

座敷に通ってから私は、口がきけないほど私を襲ってきた涙について考えていた。それが喜びの涙であったことは確かであった。意外な嬉しさから湧いてきた、溢れてきた涙であることも気がついた。

はっきりいえば、私は彼女がもっと更けて、年とってふてぶてしく荒んで見えるであろう、と思っていたようである。

仄かにきいていた彼女のたくさんの苦勞が、恐らく彼女を昔の面影もないふけた女として、苦勞に鍛えられたふてぶてしさのかくしようなない女として、私の前に現れるであろうと私は無意識に考えていたのだ。

その彼女がほとんど昔そっくりの素朴さと何よりも昔の女学生るときそのままの羞恥の身こなしで現れたこと、とつぜん私の出現にもそれが少しも歪められたり損なわれたりすることなく自然のまま、構えたものがなく、おおらかで、旅館の女将という職業的なまのまるでない態度とに、私は一瞬救われたと思ったのだ。すると涙が、私の声をふさいで溢れできたのである。

彼女がほとんど昔のままに素朴で、明朗潤達という言葉がいかにもふさわしいその性格を、

本質的には損なうことなしに、いま眠の前にあらわれた。二十数年という歳月を距てていま自分と向き合っている、という事実には私は衝たれたのであった。

座談会が終って用意された会食の席へ私はつれてゆかれた。その席にはかつて私が在学したことのある学校の上級生たちも現れて、三十人近い賑やかさになった。

貴代はあとからその席へもきてくれた。誰も彼女に対してこと新しい眼を向けるものはなかった。彼女は旅館「泰山木」の女将としてそこに坐っているのであった。すでにこの街では一応の地盤を持つ、県教職員組合ひいきの宿という、れっきとした旅館の女将として――

けれども私は漠とした不安を心に抱いていた。二十数年ぶりに逢う私の昔の上級生や下級生たちの口から、少女の日をいっしょに過したあの寮の生活の思いで話がでるとき、私は彼女の存在を意識におかずにその話に乗ってゆくことはとてもできそうではないのだ。

私の案じたとおりに、話は賑やかに寮生活のことになり、当時の舎監であった教師たちの悪口もとび出したりした。

それは悪口というよりも、むしろ私たちの悪夢の思い出といってもよかった。じっさい私はもうすでにその当時からは二十数年を経ているにもかかわらず、つい先年まで寮生活の恐怖の夢を見ることが何回もあったくらいなのだ。

私はもうすでに当時の舎監女史と同じ年令になっているにもかかわらず夢の中ではいつも十六歳の少女であり、舎監はほとんど魔法つかいの老婆のように恐ろしい存在になっているのであった。

舎監への憤懣がみんなの口から出はじめると、会席は一層賑かに、皆は一樣に女学生に帰っていた。もはや貴代の存在さえ私の心に大してひっかかることのないような、和やかな賑々しさが充ちていた。

しかし、私は決して彼女のことを忘れていたのではなかった。さっきから彼女がにこにこしながら黙って片隅に坐っているのを、いつも眼の隅に、心の一隅に置いていた。

彼女はにこにこすること、決してこの賑やかな雰囲気の外にはみだしてゐるのではないことを示していた。しかし自分から発言することは一度もなかった。

度ましくににここと坐っている彼女の周りにある静けさと沈黙を、私は痛いように感じていた。

昔とほとんど変らぬ明るくおおらかな彼女の背後に、このとき私は初めて一つの翳を感じた。

しかし一方では私は、このときの彼女の度ましいけれど、決して卑下してはいない、どっし